

伊吹山の洞窟探訪

伊吹山奉納太鼓踊では、かつて、氏神のほかに山中の社寺や山頂で雨乞い祈願をしていたことを「米原市のまつり」で紹介しましたが、祈願場所は、美濃側の鈴岡神社（伊吹山八合目）や戸谷の岩屋（中腹）などにも広がっていて、山全体に水にまつわる祭祀場所があつたことがうかがえます。

戸谷の岩屋は別に「天の岩戸」とも呼ばれており、天照大神の信仰に結びついています。入口には縄文が張られ、いまでも信仰の対象になっています。ほかにも、「弥三郎の岩屋」「酒呑童子岩屋」（『岐阜県揖斐郡ふるさとの地名』より）など、伊吹山を拠点に隠れ住んだという大盗賊や鬼にまつわるもの、本願寺教如が籠った岩屋や槍ヶ岳開山でしられる播隆上人の風穴などがあり、いずれも、行場・信仰の場であったと思われます。

5月に、米原市上平寺地区の方と弥三郎の岩屋にいきました。この洞窟は美濃側では播隆上人の風穴といわれており、伝説・史実織りなす史跡です。伊吹山ドライブウェイ12km駐車場からの尾根道をのぼ

り、1200m付近で北へ折れて、真東へ伸びる尾根へとりつき、その北斜面にあります。石灰石の巨岩が空間を作り出していく、奥行き約15m、高さは約5mあります。「皇紀二千…」と読める落書きのほか、信仰に関する遺構・遺物は見られませんでした。

かつて地元の人は、山頂にギボシ（オオバギボウ）の若芽。お浸しや天婦羅がおいしいを探りにいった帰りにこの洞窟で一服したそうです。（高橋順之）



▲弥三郎の岩屋

情報 BOX

◆米原市教育委員会では、下記のシンポジウムを開催いたします。

シンポジウム『息長の王と繼体天皇』

息長氏は、5世紀の中ごろから現在の米原市一帯に勢力をもつた古代氏族です。繼体天皇や敏達天皇の妻を出すことで大和に進出し、古代天皇家を支えた名族といわれます。

日程／平成20年3月9日（日）午後1時20分～
場所／米原市近江公民館ホール（米原市顕戸1513）
内容／

■記念講演「古代天皇家を支えた名族－息長氏」
水野 正好 氏（奈良大学名誉教授）

□基調報告「息長氏の実像にせまる」
大橋 信弥 氏（県立安土城考古博物館）

□基調報告「検証・息長古墳群の調査」
宮崎 幹也 氏（米原市情報政策課）

■シンポジウム「息長の王と繼体天皇」
コーディネーター 水野 正好 氏
パネラー

大橋 信也 氏、宮崎 幹也 氏
辻川 哲朗 氏（財・滋賀県文化財保護協会）

同時開催／

企画展『息長氏の遺宝－山津照神社古墳とその周辺』
場所／近江はにわ館 会期／3月1日～16日

◆◆編集後記◆◆

昨年のいまじぶん、わがまちの文化財担当課は文化財（文化振興）とスポーツが一緒です。■つていいながら、構成メンバーを見回して、それもありかなあ。■つて、編集後記に書いています。いまから思えば、文とスの両者は結構しつくりいつてました■いま、文化財担当課は「まなび推進課」っています。文とスに生涯学習・人権教育・各種地域団体・指定管理となった公民館施設■編集子には、わが課にどれだけの係があるのかわかりません（駄目かなあ）■文化財出身の課長と補佐は、連日連夜いろいろな会議に引っ張り出されて挨拶。文化財より難しそうなさまざまの調査・報告書類作り■編集子のみ現場にかまけて席を外すことが多く、心苦しい気持ちでいっぱいです（ハハ）■さらに仕事以上に？熱心に取り組んでいた課の月例会も最近は滞りがち■新年度には、新しいサプライズも到来か？愛読者のみなさま乞うご期待！■でも『佐加太』は続きます。支離滅裂になった（山ノ神）

米原市文化財ニュース

佐 加 太 第27号

発行 平成20年2月1日
編集 米原市教育委員会
〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206番地
米原市教育委員会まなび推進課
TEL.0749(55)8106
印刷 (株)シバタプロセス印刷



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

龍の宝冠が出土 一弥高寺跡発掘調査（2次）速報②

伊吹山の神の姿は…

前回に引き続き、国指定史跡「弥高寺跡」発掘調査からの話題をお届けします。

調査では僧侶が宗教生活をおくった僧坊跡を発見しました。その建物が廻炉裏をもつ庫裏の空間と仏間に分かれていた可能性があることを確認しました。なぜ、仏間の存在が想定できるのか。それは、多くの生活雑器に交じって、青磁の香炉や仏像に供える花瓶などの仏具が出土しているからです。そして、敷地の入口付近からは、仏像の頭に付けられていた「宝冠」の破片が8点見つかりました。

宝冠には下部に蓮の花が刻まれ、その上に龍の背中や手が浮彫りされ、鱗状の文様が見られます。龍は雨を祈る龍神を現わしており、水神信仰の仏像に付けられていたと考えられます。その大きさから立像なら像高約90cm（3尺）の仏像が想定され、簡略化された文様から室町時代のものと考えられます。宝冠は傷みやすく、多くが江戸時代に作り直されていて古いものは残っていません。また、龍を宝冠とするものは少なく非常にまれな事例です。

名山と呼ばれる多くの山には、かつて山岳修行の靈山として栄えた歴史があります。伊吹山もその代表的な山で、独立した重く荒々しい姿は、神が鎮座する神余備山として山麓の人々から崇められました。伊吹山から流れくだる大河姉川は、流域の田畠を潤し、伊吹の神を祀る伊夫岐神社（伊吹）は、大原荘（大原学区）や郷里荘（長浜市北東部）の村々から厚く信仰されています。伊吹山の神の本質は、山麓に水を分け与える「水分神」です。

出土した宝冠は、まさに伊吹山の水神信仰を示すはじめての考古資料で、おそらく毘沙門天のような武神像に付けられ、人々の信仰を集めていたと考えられます。さらに、弥高寺が伊吹山の水神信仰を担う場所であったことをうかがわせる発見です。

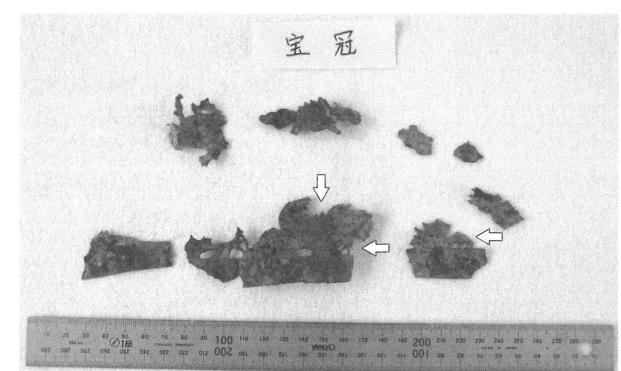
龍にまつわるエトセトラ

伊吹の神は、英雄ヤマトタケルを退け、死に至らしめた「荒ぶる神」として『古事記』に登場します。そのすがたは白い大イノシシです。また、『日本書紀』では大蛇が神の化身です。

イノシシは、その子だくさんにあやかり、縄文時代から子孫繁栄や豊穣をもたらす動物として祭られ、これが農耕社会になると豊作祈願に転じます。作物には水が最も必要であることから、イノシシもやはり水の神ととらえることができそうです。もうひとつの姿「大蛇」は、仏教と結びついて龍になります。やはり、山麓に水をもたらす龍神を現わしています。

伊吹山四ヶ寺のひとつである長尾寺（大久保）の縁起書には、伊吹山に難陀龍王が住んでいる話や、本尊毘沙門天が龍宮から流れてきた木で作られたことなど、水にまつわる話がたくさん記されています。また、奥伊吹に伝わる「姉池・妹池」のお話は、降り続大雨から村人を救うために、二人の姫が龍の姿になって姉川と草野川を流れくた昔話です。その他、山麓には「ぬしが池」（弥高）、「神籠池」（大清水）など龍伝説のため池があります。

（高橋順之）



▲仏像の宝冠
(写真の下向き矢印は「龍の背」、左向き矢印は「龍の手」)

米原市のまつり ⑦

伊吹山奉納太鼓踊（上野）

伊吹山の登山口に鎮座する三之宮神社の秋祭りで5年に1度踊られます（10月第1日曜日：次回は平成22年）。三之宮神社は、伊夫岐神社（伊吹）とともに伊吹山信仰にとって重要な神社で、中世には伊吹山中に展開した伊吹四ヶ寺が共同で社務を執りおこなっています。また、山頂を目指す山岳修験「伊吹山禪定」の一の宿としての役割を果たしており、昔も今も伊吹登山の出発点に位置しています。

太鼓踊りの始まりを記録した史料はのこっていますが、伊夫岐神社には元禄3年（1690）の記録があり、春照地区の伝承などから17世紀末頃には踊られていたようです。

長い日照りが続くと三之宮神社に参集し、早朝から夕暮れまで雨乞い祈願をしました。また、山中の悉地院や松尾寺などへ参籠し、ときには氏子全員が太平寺の村人と白旗・松明を持って山頂弥勒菩薩前の広場に集まり、柴を一人一束刈り取って積み上げ、火を焚いて野良着のままで太鼓や鉦を打ち鳴らし、片足を高く上げて「雷踊り」を踊り、降雨を祈ったといいます（千束焚）。

秋、願いがかなって豊作になると、花笠に緋色の

弓小手やカルサンで着飾った「返礼の踊り」が踊られました。現在伝承されているのはこの踊りです。大正13年と昭和22年に踊られたあと中断していましたが、昭和42年に古式豊かな郷土芸能として「伊吹山奉納太鼓踊」と命名されました。

上野と春照の太鼓踊りは、総勢約200名を超える大規模なものです。市内の他の踊りも30~50人の踊り手を数えます。多人数であることが米原市の太鼓踊りの特徴です。（高橋順之）



伊吹山頂の着氷観測所

伊吹山の山頂には、かつて気象庁の伊吹山測候所がありました。伊吹山は風と霧の山で、大正7年12月、高層気象観測の重要性が提唱されて、山頂にわ



▲観測所跡

が国初の本格的な山岳気象測候所が建てられました。大正15年には「セント・エルモの火」が日本の陸地上で初めて観測され、昭和2年には観測史上の世界記録である11.82mの積雪を記録しました。

伊吹山付近は、若狭湾と伊勢湾がせまってくる本州で最も狭い部分に当たり、冬はここを目指して若狭湾から北西季節風が吹き込み、気温が低く、積雪量が多いことが特徴です。

さて、測候所跡地の一画にコンクリートの土台と鉄塔があります。これは戦時に海軍航空技術廠がおこなった、「飛行機機体の水結防止法と氷結を生起する気象の研究」による現地測候所として設けられた着氷観測所の跡です。こうした施設では飛行機への着氷を防止するため主翼前面のゴム張、薬品の塗布式や滲出式など様々な実験がおこなわれていたようです。（中井 均）

中川泉三と伊吹山

中川泉三は現在の米原市大野木出身で、明治・大正・昭和にかけて出身地の旧坂田郡はもとより、『蒲生郡志』『栗太郡志』『愛智郡志』などの編纂により、滋賀県全体の歴史研究に深く関わった地方史研究家です。そして、当時の日本を代表する歴史研究家との交流も深く、“地域史の編纂は中川に聞け”と言われたその業績は、まさに現代につながる「地方史研究」の魁と言えるでしょう。

また、中川泉三は「伊吹山人」という雅号を使い、自宅から見える伊吹山を師と仰いでいたと書き残すなど、伊吹山に対して深い思い入れを持っていた人物でもあります。

その中川泉三が「伊吹山」に関して最初に著した出版物が『膽吹山』です。『膽吹山』は明治38年（1905）に出版された伊吹山登山・観光の案内書です。『膽吹山』が出版された明治の末頃は、観光旅行が贅沢から娯楽に変わりつつあった時期です。全国に鉄道網が整備されたことによって、旅行するため必要な時間と費用が少くなり、旅行を楽しむことができる人々が増えました。『膽吹山』が出版された背景には、伊吹でも登山客が次第に増えて、登山案内が必要とされはじめたことがあるだろうと思われます。

『膽吹山』出版の前年、明治37年（1904）に編集した漢詩集に、当時の伊吹山の様子を描いた次の文があります。

「山中に薬草を産す。近時都下の学生遠来、植物を採集する者頗る多し。」
これは「膽岳薔薇」（なんがくばう）と題して伊吹山の薔薇の花を詠んだ漢詩の解説の一部で、伊吹の薬草や植物が注目され、採集のため登山する人が多かったことを示しています。

初版は好評により品切れとなったことから、更に情報を加え二版『伊吹山名勝記』、三版『伊吹山案内』と版を重ね出版されました。



▲『膽吹山』『伊吹山名勝記』『伊吹山案内』

その内容を見てみると、伊吹山だけでなく周辺の歴史や史跡の紹介、登山ルート、宿泊場所などが詳しく案内されており、この案内書さえあれば伊吹山のことが手に取るようにわかります。

例えば、近江長岡駅から登山するのが中川泉三お勧めの観光ルートであったり、周辺の歴史や史跡の紹介も、初版は中川泉三の地元大野木周辺が多かったが、二版以降は関ヶ原や垂井方面も多く取り上げるなど、広い地域の人々が伊吹山へやって来る様子をうかがうことができます。

泉三が案内書を執筆した背景には、登山案内が求められていたことのほかに、泉三が伊吹山に対する知識と関心を持ち合わせていたことがあります。泉三は『柏原村史』（未刊）『近江坂田郡志』（大正2年刊）の編さんに携わっていました。またヤマトタケルの伝説や伊吹山麓で発掘された石器に関する論文も発表しています。こうして中川泉三という人材を得て出版された『膽吹山』は、泉三自身にとっても伊吹山に関する代表的な著作になりました。

「伊吹山」を愛し尊敬した中川泉三。この三冊の出版でさらに「伊吹山」が多くの登山客や観光客で賑っていたことを、喜んでいたことでしょう。

（桂田峰男）



▲中川泉三(杉沢遺跡で)



▲調査会記念撮影（三合目）